

## 「問いづくりワークショップ」 指導案

### 1. 概要

「質問づくり」(QFT: The Question Formulation Technique) は、米国の住民運動の指導者ダン・ロステイン氏が、質問ができず必要な情報や社会的支援を得られない貧困層の人々の教育のために開発した指導方法である。その手法について解説した著書『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』では、生徒たちは「質問づくり」を通して、①たくさんのアイデアを考え出し、幅広く創造的に考えられる「発散思考」、②答えや結論に向けて情報やアイデアを分析したり、統合したりする「収束思考」、③自分が考えたことや学んだことについて振り返る「メタ認知思考」を身につけることができる。これらの思考は、1年生の生徒たちが嵯峨野高校で深い学びを実現するために身につけておくべきものである。

また、このワークショップでは、生徒たちに「質問づくり」を体験させながら質問の性質や探究活動につながる「問い」の性質について理解させることを目的としている。探究活動を本格的に始める前に「問い」を意識させ、授業で学んだことや本で読んだこと、身の回りの出来事・ニュース等に対して疑問をもつことが、主体的に学び、粘り強く探究するための第一歩であることを認識させたい。

### 2. 目的

- ・質問づくりを通して「発散思考」、「収束思考」、「メタ認知思考」を体験する。
- ・グループで取り組むことで、多様な意見や考え方に触れる。
- ・質問の性質について理解する。
- ・探究活動につながる「問い」の性質について理解する。

### 3. 事前準備

#### ① 準備物

質問づくりワークシート、質問記入用紙、SDGsに関するプリント、スライドを提示するための iPad

#### ② グループ分け

事前に生徒を4人ずつのグループに分けておく。

### 4. 内容（時間は目安）

時間	トピックと概要	留意点
10 分	<b>【導入】</b> ・ワークショップの目的を説明する。 2022 年秋から、世界中で ChatGPT など生成系人工知能(Generative AI)が公開になった。インターネット上にある既存の文章や画像イメージを大量に機械学習し文章やイメージを生成する。その質や正確性は日に日に向上している。この先我々人間に求められるのはどのような力なのか。大量の情報を処理する力ではないことは確かだ。様々	・ChatGPT のニュースは他の例に差し替えてもよい。 ・「問い」は『「質問」のうち、解決の道筋がすぐには明らかにならない、もしくは唯一の正解が存在しないもの』と定義している。

	<p>な情報から深く思考したり、新たなことを発見したりする力である。自分なりの考えをもってゼロからイチを作り出す力である。</p> <p>「探求」は探し求めることであり、「探究」は探し求めることである。決まった答えを探すだけならコンピュータで検索すれば簡単に手に入れることができる。「探究」は唯一の答えのない問題、つまり「問い」に対して「自分なりの答え」を探す活動である。</p> <p>探究活動につながる「問い」について考えるために、まず「質問」をたくさんつくるワークをやってみよう。</p>	
5 分	<p>【アイスブレイキング】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループの代表者が決めたお題を、「はい」「いいえ」で答えられる質問をぶつけてあてるゲームをさせる。(3 分間)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例を説明して、ルールを理解させる。グループの代表者は「自分の好きな食べ物」をワークシートの裏に書く。</li> <li>・すぐにあたったグループは2 ゲーム目に入ってもよい。</li> </ul>
5 分	<p>【SDGs（質問の焦点）の説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SDGs について、簡単な説明を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SDGs については、小・中学校で既習の生徒が多いと予想される。</li> </ul>
5 分	<p>【質問づくりのルールの確認】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ルールを説明する。</li> </ul> <p>今回は、できるだけたくさん質問を出すために、話し合ったり、評価したり、答えを言ったりしないことを確認する。また、書記が書きとる時間に配慮するよう指示しておく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とにかくたくさん質問を出すことが目的であると念押ししておく。ただし、なかなか質問が出ない場合は待つように言うておく。</li> </ul>
15 分	<p>【質問づくり】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問を出させる。(10 分)</li> <li>・質問づくりをした感想をグループで話し合わせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問づくりの間は机間指導をする。ルールが守られているか、どんな質問が出ているかチェックしておく。</li> <li>・いくつくらい出せたか、どんな点が難しかったか、数名の生徒に聞いてみる。</li> </ul>
10 分	<p>【質問の分類】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「閉じた質問」と「開いた質問」について説明する。</li> <li>・質問を「閉じた質問」と「開いた質問」に分類させる。</li> </ul> <p>(5 分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導をしながら、「閉じた質問」と「開いた質問」に分類しづらいものは、無理に分類しなくてもよいことを伝える。(簡単には分類できないことに気づかせる。)</li> </ul>

10 分	休憩	
15 分	<b>【質問の性質を理解する①】</b> ・「閉じた質問」と「開いた質問」のそれぞれの長所と短所を挙げさせる。(5 分) ・グループごとに長所と短所を発表させる。	・長所や短所に正解はないので、誘導せず自由に挙げさせるようにする。 ・質問する場面によって、それぞれの性質が長所にも短所にもなることに気づかせる。
15 分	<b>【質問の性質を理解する②】</b> ・質問を 1 つ選び、「閉じた質問」は「開いた質問」に、「開いた質問」は「閉じた質問」に書き換えさせる。(5 分) ・グループごとに発表させる。	・書き換えによって内容が変わってもよいことを伝える。 ・書き換えると、質問内容が具体化されたり、質問に含まれていた意図があらわれたりすることに気づかせる。
5 分	<b>【質問の性質を理解する③】</b> ・質問は目的によって使い分ける必要があることを理解させる。自分の興味・関心から湧き出た質問のうち、インターネットで検索しても答えのわからないようなものが探究活動につながる「問い」になる。	
10 分	<b>【質問を 1 つ選ぶ】</b> ・自分が探究するならどの「問い」にするか 1 つ選ばせる。(3 分) ・グループ内でそれぞれ理由とともに発表する。	・1 つ選ぶのに悩む生徒が多い場合は少し時間を延ばす。
5 分	<b>【問いから次のステップへ】</b> ・先ほど選んだ「問い」に対する「自分なりの答え」を見つけるためにはどんな情報を集めればよいか考えさせる。	・情報を集めるためには、大きな「問い」を小さな「問い」に分割する必要があることに気づかせる。
10 分	休憩	
10 分	<b>【振り返りとまとめ】</b> ・実際にグループで探究していくときは、話し合いながら検討していくことが大切である。 ・「探究」の過程で「問い」が磨かれ、変化していくことを説明する。 ・このように「問い」をつくっていくためには、普段の授業で学習したこと、本やニュースで知ったこと、友人との会話などに対して、主体的に関わっていくことが必要である。受け身の姿勢では	

	自分の興味・関心を高めることもできない。自ら学ぶ姿勢で様々なことに取り組んでほしい。	
--	--------------------------------------------	--

## 5. SDGs とは

持続可能な開発目標（SDGs : Sustainable Development Goals）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

（外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> より）

## <参考資料>

・ダン・ロスタイン、ルース・サンタナ、吉田新一郎『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論（2015）